

第二節 天皇の行幸

一 天皇の行幸について昇曙夢氏はその著「大奄美史」に次のように記録している。

千歳一遇の光栄

昭和二年八月六、七、八日は天皇陛下の行幸を仰いだ歴史の記念日として奄美島民の永遠に忘るべからざる光栄の日である。時恰も八月初旬佐伯湾頭における海軍聯合艦隊の戦技演習を統監せらるるに当り、大島への行幸を仰出だされ、盛夏猛暑の最中にも拘らず行程幾百哩を遠しとせず、この辺陲絶海の孤島に渡御せられ、而も三日に亘つて親しく民情を視察遊ばされたことは開闢以來始めてのこととして、二十万の島民は今更の如く皇恩の忝けなきに感泣するばかりであった。

この千歳一遇の光栄は、陛下が常に民衆の上を宸念遊ばさるる仁徳の現れであることは言ふまでもないが、特に先年の大風災に際し有難き御思召を以て御内帑金を

賜ったことが陛下の記憶に存してをり、平素天地の幸に恵まれない南海の孤島を憐ませ給ふ特別の御心より今回の行幸を仰出だされたことと拝察するのである。今茲に当時の記憶を呼び起して行幸の模様を伝へることにする。

名瀬町御上陸

愈々その日となつて、奉迎の準備全く成れる大島の首都名瀬町は朝来歡喜の色に包まれ、全島より集つた四万の民衆は沿道の両側に坐して今日の行幸を待ち受け、軒毎に立てた国旗は七夕祭の色紙と共に折柄の涼風に翩翩として絶好の奉迎日であった。やがて午前十一時を過ぎる頃お召艦山城は名瀬港外遙かの沖合に勇姿を現はし、満艦飾を施した供奉艦太刀風・羽風・秋風・帆風の四駆逐艦を従へ、檣頭高く天皇旗を翻へし、威風堂々海を圧して港口に投錨した。忽ち起る奉迎の煙火高く名瀬の上空に炸裂し、先着警備艦長良の発する二十一発の皇礼砲殷々として奄美の天地に轟くその中を、純白の海軍大元帥服に燦たる大勲位副章を帯びさせられた陛下には、長途の航海に御疲労の色もあらせられず、奉迎の長官に謁を賜つた後、各艦全員登舷、君ヶ代奏樂の裡に艦

載舟艇に召され、関屋宮内次官・珍田侍従長・奈良武官長など数多の供奉員を随へさせられ、午後一時十分新設の名瀬港仮棧橋に御着、松本知事の先頭にて奄美大島に第一歩を踏ませ給ふた。これより支庁まで七町に亘る道筋の両側に坐した四万の民衆が、文字通り眼の前に御顔を拝した時の感激は如何許であつたらう。たゞく嬉し涙に寂として声なく、真に大島始まつて以来の歴史的シーンであつた。

かくして大島支庁に入らせられたまふや、庭内に堵列する県庁及び支庁員を初め、各団体代表者並に高齢者・節婦・功労者に拝謁を許されて、御座所に入られた。御座所では松本知事以下の有資格者に単独拝謁を仰せつけ、知事の呈する奉迎文を嘉納せられ、また知事より奏上する郡政を熱心に聴取遊ばされた。終つて階上の特産陳列品大島紬・黒糖・鯉節などを一々御覧あらせられ、知事にいろ／＼と御下問の後、支庁の庭にて大島紬製織の実況・黒糖製造の工程・ハブ毒素採取実況等を興味深く御覧あらせられた。これより名瀬小学校に成らせられ、松本知事・川崎校長の案内にて大島中学校・実科女学校・小学校児童の成績品陳列室に入らせられて、諸作品

を繞つて静々と大島海峡に入った頃から、お召艦を遙拝せんとして集まる数方の民衆は、文字通り古仁屋埠頭を埋めてしまった。午後七時入港と同時に警備艦長良の砲門は開かれて、二十一発の皇礼砲は殷々として轟き、名瀬におけると同じく古仁屋始まつて以来の歴史的光景を呈した。

かくて赫々と照りつけた真夏の日はいつしか島山の彼方太平洋の波に落ちて、紺碧の空・紺青の海は斉しく茜に染まり、浜千鳥の声爽かに夕を告げ、弦月淡く中空に輝いて、如何にも平和を象徴するかのやう。夕風亦そよ／＼とわたつて、南海常夏の夕景色は先づ陛下の御感を深ふした。夜は島民の熱誠溢るゝ提灯行列や、埠頭に「奉迎」の二字を赤く大きく描き出したイルミネーションで古仁屋湾内を明るくし、有史以来初めての賑ひを呈したが、夜の更くるに従ひ、さしものどよめきも漸く静まり、やがて月影も落ちて、匝熟帯特有の闇夜に銀砂の如き星影美しくお召艦の上に輝いて、古仁屋における第一夜を過ぎせ給ふた。然るにこの日の夕刻から吹き出した風は夜に入つて強風となり、古仁屋湾内は白馬の躍り狂ふに委せたが、お召艦は名物の大風にもめげず、泰然として

に親しくお目を留めさせられた後、校庭梅檀の樹の間に設けた御座所に立たせ給へば、整列せる郡内二十九校約五千の児童は最敬礼を以て奉迎し、知事の発声で一斉に天皇陛下万歳を三唱した。

それより陛下には濃緑の蘇鉄美しく生ひ茂るウガン山の赭土色の登山道に歩を運ばせ給ふた。真夏の日光の反射烈しき急勾配の坂路を、いとも健かに辿らせ給ひ、山腹に清楚にしつらへた野立所に暫時休憩遊ばされた。眼下には町家の軒毎に七夕の色紙虹の如くたなびき、名瀬湾の静かな水光は祝福にきらめいてゐた。陛下にはこの絵の如き南国の常夏の風光を賞覧遊ばされ、やがて午後二時二十五分下山になつた。それより再び群衆堵列して奉送申上げる本町通りを玉歩軽やかに会釈を賜ひつつ御機嫌麗しく仮棧橋より帰艦遊ばされ、郡民は海岸に堵列して声を限りに万歳を奉唱しながら、御旅程のつゝがなきを祈つた。

古仁屋御上陸

御召艦山城は長良の皇礼砲轟く中に、天皇旗を掲げて午後三時半抜錨、黒潮うねる大海原を緩かに南日本国防の第一線たる古仁屋に向つた。山城が會津高崎燈台の沖

浮城の如き威容を誇つた。

翌くれば七日、密雲低く垂れこめてゐたが、旭光雲間より洩れ初め、御召艦のメインマスト高く天皇旗は燦として翻り、日章旗はためく道筋の両側には三万の奉迎者が幾重にも列坐してゐる中を、午前九時陛下にはいとも身軽に軍用棧橋へ御上陸、南国気分漲る蘇鉄葉の奉迎門を通御遊ばされ、道筋に堵列する奉迎者に絶へず拳手の礼を賜ひつゝ、松本知事の先導で奄美大島要塞司令部に入らせられた。司令部では福田第六師団長の先導で御座所に入らせられ、師団長以下有資格者に単独拝謁を仰付けられ、その他高齢者・功労者に列立拝謁を賜ひ、御紋章入の御菓子の下賜があつた。

かくて陛下には要塞司令部を出御、前年暴風雨の惨害の痕まだ生々しく残つてゐる古仁屋小学校に成らせられ、島の子供が赤誠籠めて製作した約三百点の成績品を御覧遊ばれ、また蘇鉄・ルリカケス・黒鬼・その他数々の特産品にも一々御目を通された後、校庭に設けられた御座所にて小学児童・青年団・処女会・婦人会員等約七千名の最敬礼を受けさせられ、ついで松本知事の発声で万歳を三唱した。終つて学校の背後にある御野立所高千

種神社境内に御登りになり、古仁屋湾の風光を展望あらせられ、再び御徒歩にて海軍棧橋より午前十時二十四分、各艦登舷礼の裡に帰艦遊ばされた。

この日午後一時半より御旅情を慰め奉る余興として、青年団や在郷軍人団の選手によつて大島特有の板付舟の競漕が行はれ、海国男子の妙技を尽して輸贏を争ふさまは壮絶を極めた。その間陛下には艦橋に出でさせられて御興深げに御覧遊ばされた。夜は夜で海陸相呼応して極めて特色的な提灯行列が行はれ、未會有の盛観を呈したが、陛下には御召艦上から殊の外御機嫌麗しく御覧遊ばした。かくて七日の夜は御召艦上にて各専門の学者を相手に博物の研究を召され、また県より献上の大島郡実況の映画を御覧あらせられたが、海岸では絶えず篝火を焚き、煙火を打上げて御興を添へた。雲間を走る月影は波に躍り、この光栄に輝く夜の港を昼の如く描き出し、山城・長良のサーチライトは絶えず廻転して野山を照らすなど、南島の美しき海上に御仮泊の第二夜は楽しく更けて行つた。長さ七里の大島海峡を繞る沿岸では二百ヶ所近い要所に篝火を焚いたが、紅焰天を焦し海に映じて壯觀極りなく、陛下にはデッキに御立ちになつて興趣深く

御覧遊ばされたと拝聞する。

八日の朝に至つても夜来の暴風は鎮まらなかつたが、この朝陛下には前夜に引続き各専門の学者を御召になり、島民より献上の動植物に就いて研究を続けさせられ、前日薩川湾に御微行の際潜水夫をして採取せしめられた珊瑚に就いても顕微鏡下に研究遊ばされた。この日は午前と午後の二回に亘り御微行にて折柄の暴風をも厭はせられず、御召艇が木の葉の如く翻弄さるゝ中を渡連湾に向はせられ、潜水夫をして海底の生物を採取遊ばされ、特に薩川湾において潜水夫の荒くれた手を取つて御引上になるなど、御仁慈の厚さと御研究の熱心なるとは拝聞するだに感激の極みであつた。天候は依然として変わらず、古仁屋湾の風波は烈しかったが、陛下におかせられては御予定の如く、八日午後四時御発航御還幸の途に就かせられた。沿岸各村落の民衆は奉迎の時と同じく赤誠を籠めて手にく日章旗を振り、万歳を連呼し、煙火を打上げて、艦影が港外に没するまで御名残を惜みつゝ奉送申上げた。

御仁徳の数々

天皇陛下には今回の行幸に際し、名瀬においても古仁

屋においても侍医をして親しく多数の患者を診療せしめ、特に重病患者の宅には侍医を御差遣あらせられ、また高齢者・節婦・産業功労者にはそれぐ御菓子を賜り、窮民を御慰問遊ばされる等、皇恩の優握なるに感泣しない者はなかつた。陛下には特に大島の教育及び産業に御心を注がせ給ひ、教育奨励金五千円御下賜の外、名瀬・古仁屋を始め関係各村の青年団・在郷軍人団にもそれぐ御下賜金の沙汰があり、その他重要物産の御買上、斯業功労者の寵賞等深き叡慮の程が拝察されて有難い極みであつた。なお紬染料のテーチ木は根絶の憂ひなきか、鉄道の枕木は多量にあるか、山地が多いから植林してはとの優握なる言葉を賜ひて、大島産業の根本方針を授けさせられ、更に風害は恢復したか、学校は復旧したか、ハブの絶滅は出来ないかと、真に親子の情愛を以て宸襟を悩ませられ給ふ等、誠に恐懼に堪へないことであつた。

〔奄美〕誌参照

二 奄美社では、昭和二年九月一日発行の月刊「奄美」を行幸記念号とし特集を組んでいる。記事の中に和泊町出身の次の方々の氏名を見ることが出来る。

地方自治功労者として、支庁または古仁屋要塞司令部において、列立拝謁を許され且つお菓子を御下賜された。

和泊村手々知名 沖 元 綱

扈從記者団

鹿児島朝日新聞社 武山 宮 信

奉拝者

○大島支庁に於て

赤木名校長 東 仲 一

○要塞司令部に於て

田検校長	橋 口 盛 隆
須子茂校長	市 来 惟 文
和泊村長	沖 島 曾 徳
和泊校長	玉 江 末 駒
国頭校長	島 義 智
内城校長	川 平 植 美
知名校長	川 平 植 吉
田皆校長	新 納 盛 定